

ソウル市の芸術文化教育政策 「夢見る青春芸術大学」を中心に

陸 善 和光大学研究生

1 ―― はじめに

現在、韓国の文化は「韓流」¹⁾という言葉と共に世界に広がりつつある。しかし、それは一部のアイドル歌手やドラマ、または映画に限られており、ある程度の時間がたてばその力を失うこともあるだろう。実際に「韓流」の風が吹き始まった1990年代末から2000年代初頭に比べると、現在の「韓流烈風」はその力が弱まっている。

一方この韓流烈風は、韓国の文化を外に知らせるだけではなく、多くの外国人を韓国に呼び寄せる役割も果たしてきた。その結果2012年韓国を訪れた観光客の数は初めて1,000万人を越える数値を記録したのである²⁾。

このような韓国文化の振興は、韓国人自身にも大きな影響を与えた。韓国の文化が世界に知られるのに伴って、国民の文化に対する意識も高まり、自らの文化を楽しもうとする傾向が多く現れ始めた。それは自文化に対するプライドや自信から始まり、最終的には自分自身の価値を上げることになったのである。そして、国家や各都市もそのような国民や市民の要求に答えるために、現在、様々な文化政策を行なっている。

経済の発展に伴って、韓国はもちろん、海外においても、多くの都市で教育のレベルも高くなり、人々は物質的な満足だけでなく、さらに多様な刺激を求めるようになった。その結果、海外に目を向けるようになる一方、精神的な欲求を満足させてくれるもの、つまり文化や芸術活動に多く興味を持ち始めるようになっ

1) 1999年、韓国のテレビドラマが中国に輸出され、2年後にはアイドルの歌が広く知られるようになり、アジアを中心に韓国の大衆文化が人気を集めた現状を示す。「韓流」という言葉は2000年から中国マスコミで、このような現象を表現し始めたのを切っ掛けに広く使われることになった。(韓国斗山百科事典インターネット版、2013年)

2) 文化体育観光部、海外文化広報院 (Korean culture and Information service) <http://www.kocis.go.kr>

たのである。生活が豊かになるにつれ、人々は多様な情報をリアルタイムで得ることが出来たのはもちろん、経済的にも時間的にも余裕が出来ようになり、もっと多様で新しいものを求めるようになった。その人々の期待に応えるため出来たもの、それが文化商品³⁾やサービスであり、都市はそれに応えるために文化に関する事業を次々と提案するようになったのである。

ソウル市⁴⁾は韓国の首都であり、経済はもちろん、あらゆる文化の中心にあると言っても過言ではない。

ソウル市は都市のブランド化⁵⁾を目標にしており、その中には市民の文化的な福祉も含まれている。現在ソウル市は「一緒に創る文化都市」と言うキャッチフレーズで芸術団体や市民を対象に様々な政策を行なっている。特に 2000 年代後半からは文化的に疎外されている特定層、たとえば高齢者や低所得層、多文化家庭、外国人労働者や移住民などのために企画された政策も多く行なっている⁶⁾。

ソウル市は文化を通じて多様な活動や政策を広げ、高い価値を生み出そうとしている。一般人はもちろん、特定な人々を対象として様々な政策を行なっている。それは芸術だけではなく、外国からの移住民のための韓国語教育や、民間教育機関に通う経済能力がない子供のために学習支援もしている⁷⁾。その中でも芸術文化に関する政策は活発に行なわれており、2012 年にはソウル市予算の 15.8% を占めるほどであった⁸⁾。

このような動きはソウル市だけではなく、地方都市でも町おこしのために地域の特徴を活かしたいろいろな政策を企画し実行してはいるが、その結果は必ずしも期待に応えるものでないことも多い。

その理由は多数あるが、中でも政策の対象になる市民に対する十分な研究が行なわれていないことや、芸術文化⁹⁾の伝達者である教育団体が貧しい環境で活動しているということがある。

本研究では、2012 年に筆者が実際に参加したソウル市の高齢者を対象にした、芸術文化教育政策「夢見る青春芸術大学」¹⁰⁾を中心に現在の芸術文化政策を分析する。

「夢見る青春芸術大学」は、2008 年から始まり、2013 年で 6 年目になる。こ

3) 映画、放送、音楽などはもちろん、その内容に文化的な要素を含んで商品化されたものを指す。

4) 「ソウル特別市」が正式な名称であるが、本稿では「ソウル市」と表記し、ソウル市庁のことも含む。

5) 他の都市と区別される、特有の記号、デザインなどを持つことで、その価値を上げること。

6) ソウル市ホームページ、<http://www.seoul.go.kr>

7) 大学生のボランティア活動を連携し、多文化家庭や低所得層の子供たちに放課後、自宅で学習支援をしている。

8) ソウル市庁、文化観光デザイン本部の重要業務報告書、2012 年 2 月発表。

9) 韓国では「文化芸術」というが、この論文では固有名詞以外では日本に合わせて「芸術文化」と表記する。

10) ソウル市主催、ソウル文化財団主管で 2008 年から 60 歳以上のソウル市民を対象に行なわれている芸術文化教育プログラムである。

のプログラムはソウル市だけではなく、全国的にも成功した芸術文化教育プログラムであるため、数多く研究されている。

しかし、今までの研究をみると政策の理念や目的など方針上の分析研究が多く、具体的な現場の研究はあまり見られないのが現実である。したがってこの研究では筆者が実際に講師として参加した教育プログラムを例として分析を行ない、政策と現場の間に存在する問題点を研究する。また、今まで受ける側—教育を受ける側で、本文では高齢者たち—を中心にしか評価されなかった政策を生産者、つまり教育を行なう側—教育プログラムを行なう芸術教育団体—から研究分析することで、お互いに質の高い芸術文化教育ができる環境改善の指標になることを望むのである。

2 — ソウル市の芸術文化教育政策

韓国は独立してから第1共和国から現在の第6共和国に至る60年間、経済はもちろん、文化に関しても様々な政策上の変化を見せてきた。新しい政府が成立するにつれ、芸術文化政策もその特色を変えてきたのである。

1960年代までは韓国戦争もあり、混乱した国家の修復が第一の課題であり、文化や芸術に目を向ける余裕はなかった。その後も韓国のほとんどの国家政策は経済発展に向けられていたけれども、ようやく1972年「文化芸術振興法」¹¹⁾が制定され、1973年「韓国文化芸術振興院」¹²⁾が設置された。日本では1950年に文化財保護法が制定され、1968年には文化庁が創設されたのに比べると遅い出発である¹³⁾。

しかし、この時期は芸術文化に対する認識は浅く、実際には政府主導下で植民地時代や韓国戦争などで乱れた文化的な主体性を確立し、伝統芸術文化を発展させることにその目的があった。

1980年代から韓国の芸術文化政策はようやく大きな変化を見せた。軍部によるクーデター¹⁴⁾によって成立された第5共和国(1980~1988)はその正当性を示さなければならなかったこともあり、この時期の文化に対する理念は新しい時代、新しい歴史を創るために民族文化を開発し、文化的な福祉を実現することであった。

今まで一部の特権層に限られていた芸術文化政策の対象を国民全体に広げ、中

11) 1972年8月に、韓国の芸術文化の振興や伝統芸術文化を継承し、新しい文化を創造するために制定された。最初の制定後、数回訂正され、1995年1月に全文改正された(韓国民族文化大辞典、韓国学中央研究院)。

12) 文化体育観光府に所属する機関で、2005年に設立された。韓国の芸術文化教育全般に関わる事業を行なっている。

13) 後藤和子『文化政策学』有斐閣、2001年 p.147

14) 1980年5月17日にジョン・ドゥファン、ノ・テウらの新軍部が政権を握るために起こしたクーデターである。

中央集権的な政策から地方自治体に少しずつ分散させ、地域の芸術文化も拡大させたが、80年代までは地方自治体には自発的に動く能力は少なく、いまだに中央集権的な行政が続いた。

しかし、一方では芸術家たちの専門性を尊重し、創作活動を支援するための体制が整備され、さらに公演のための劇場や市民会館や区民会館のような地方の文化施設が多く設置された。これだけの進展があったものの、政府の関与が強いため制限されることが多く、芸術活動にも表現の限界があった。

1988年に成立し、現在に至る第6共和国の文化政策は第5共和国の時に助成された施設を基に行なわれた。以前、政府の下で表現が不自由だったのに対し、第6共和国は文化民主主義を打ち上げ、表現の自由を尊重し、1990年に文化分野を担当する独立行政機関「文化府」を設置した。韓国の芸術文化政策は1990年代に入ってからいっそう活発で積極的に推進された。1991年には専門的な芸術家を養成する「国立芸術総合学校」¹⁵⁾を設置するために、特別大統領令が制定され、1992年には「芸術の殿堂」¹⁶⁾が完成している。

第6共和国の二番目の政府である文民政府¹⁷⁾は、今まで官の主導下にあった文化に対し、政府は支援しても関与はしないと公表し、文化に対して多くの表現の自由を与えた。そして文化産業に対しても支援を強化した。そしてさらには、もっと幅広い文化活動のために、今まで表現の自由を縛っていた規定を改正し、作家はもちろん、芸術家の反政府的な作品制作や言論による社会批判まで許可したのである。

現在の韓国の芸術文化の発展は、この時期から始まったと言ってもよい。

その中でもソウル市は、他の都市よりも早く、芸術文化の中心地として役割を果たして来た。中央集権的な政策であったときも、ソウル市はその中心となったため、他の地方と比べるとはるかにその発展ぶりは早かった。

以前は地方自治法により内務部長官の管理下にあったソウル市の法的地位は、1962年「ソウル特別市行政に関する特別措置法」によって国務総理の直属になった。また、ソウル市長はもちろん、ソウル市に所属する公務員の地位も昇格したのである。ソウル市長は国務委員と同じく、国務会議に参加出来るようになり、ソウル市に関する政府の政策に参加することが出来るようになった¹⁸⁾。

それによってソウル市は、業務の配分や市政に関する企画、調整などで自立的に業務を推進する権利を得られ、芸術文化政策にもソウル市の特徴を生かした政策が可能になったのである。

15) 1991年に設立された以降、1993年に音楽院を開院してから「韓国芸術総合学校」として開校した。

16) 1988年2月に設立された複合芸術センター。

17) 1993～1998：1963年から続いた軍部が終わり、民主自由党が選挙に勝利し14代目の大統領としてキム・ヨンスン氏が就任した政府を示す。

18) ソウル市庁ホームページ参照、2013.10、<http://www.seoul.go.kr>

(1) ソウル市の芸術文化政策

ソウル市の芸術文化政策は、「文化デザイン本部」により、ウル市で行なわれている小さなイベントから大きなフェスティバルまで企画・管理される。そしてソウル市を文化都市として強化するために、2007年5月31日に「文化デザイン

表1 文化芸術課の業務内容

文化 芸術 課	芸術政策チーム	・芸術文化政策樹立及び伝統芸術に関する事業 ・文化空間との連結プログラム活性化事業
	宗務チーム	・宗教業務総合計画に関する事項 ・宗教界の業力事業総括 ・書院・郷校に関する事項 ・伝統お寺に関する総合計画 ・テンプルステイに関する事項
	文化振興チーム	・2013年ソウル写真フェスティバル推進 ・フォトレートギャラリー建立推進 ・独立68周年記念音楽際開催支援 ・地方文化院関連業務 ・文学の家ソウル運営支援 ・誕生100周年文人文学祭支援 ・文学振興に関する事項（文学博物館） ・芸術文化非営利法人関連業務 ・専門芸術法人指定管理 ・2013年ソウル女性合唱フェスティバル推進
	市民文化チーム	・新聞、定期刊行物管理運営 ・芸術文化教育総合計画 ・文化バウチャー事業 ・社会芸術文化教育 ・夢見る青春芸術大学 ・ソウル芸術文化支援センター運営 ・私の町オーケストラ事業 ・市民文化演劇教室運営 ・公演芸術創作活性化事業 ・国楽分野芸術講師支援 ・町メディア活性化 ・青年文化学校運営 ・小・中学生の芸術文化体験学習 ・低所得音楽・美術英材教育 ・市民芸術家育成支援 ・成人サークル連結青少年芸術文化教育事業
	祝祭振興チーム	・ソウル市の祝祭政策・評価 ーソウル文化の夜 ーソウル世界花火祝祭 ーハイ、ソウルフェスティバル支援 ー国際アートフェスティバル支援 ー燃灯祭り ーソウルミュージカルフェスティバル ・市長の要求事項の総括 ・ソウル市、祝祭関連資料管理 ・地域特性文化事業

(ソウル市庁ホームページ参照、<http://www.seoul.go.kr>、2013.10)

表2 ソウル市の文化政策目標

文化を通じ、幸福で豊かな街づくりを支援し、共同体文化を回復する	生活圏内の市民の文化創造活動場作り
	町の図書館・博物館の拡充
	市民と一緒に作る芸術文化プログラムの拡大<表3>
	市民の健康を守り、生活体育を活性化
	歴史文化財遺産の保存・継承
職場作りのブルーオーシャン ¹⁹⁾ 創造産業の育成	生活を便利に、社会問題を解決するデザイン
	多様な創作者・作品の支援で創造産業の土台作り
	未来の食べ物創造産業
	ファッション・映像・アニメーションなど未来産業育成
	ソウルの歴史・文化支援を活用したスマート観光推進

(ソウル市庁ホームページ参照、<http://www.seoul.go.kr>、2013.10)

表3 市民と一緒に作る芸術文化プログラム

プログラム	内 容
市民芸術家と日常文化共有機会の拡大	文化疎外地域・施設を訪問する文化活動 ・芸術家や専門芸術団体が直接福祉施設を訪問し、多様な公演や展示をする機会を提供 ・公演団体を募集し、多様な公演を提供（600回） ・公演して欲しい機関などの意見（公演対象、ジャンル、回数など）を聞き取りした上での公演推進
	市民サークルを通じた芸術劇場運営 ・生活圏内の公園、道、広場などの野外空間を活用した無料芸術公演（1000回） ・毎年4～11月は毎週1回以上運営（50箇所） ・芸術家や団体のボランティア活動の活用（200個の団体、約1400名）
地域社会での芸術文化教育の拡大	疎外階層のオーケストラ教育の拡大 ・貧困地域の子供たちでオーケストラ結成（小学校3～5年の250人） ・企業後援など民間の協力で対象地域拡大 ・元ソウル市交響楽団の団員や音楽専攻者による教育運営（週3回）
	学校の週5日制に備え、子供・青少年対象の芸術文化教育の拡大 ・小・中学生の芸術文化体験学習運営（博物館・美術館を利用して参加できるプログラム10個運営（週末に1回）） ・夏休み現場中心の芸術文化体験教育の運営 ・低所得層を対象とした音楽・美術に関わる才能の発掘や教育支援（小・中・高で160名）
	低所得層、及び高齢者対象の地域中心の多様な芸術文化教育 ・低所得家庭の青少年、障害者など、社会層外階層の芸術文化教育 ・高齢化時代の高齢者対象の芸術文化教育（夢見る青春芸術大学）
子供・青少年対象の芸術文化公演鑑賞支援	低所得層対象の文化パウチャー ・鑑賞が出来ない人々に鑑賞機会を提供 ・公演、展示、映画などの鑑賞が出来る専用カードを支給
	文化勸奨にチケットの提供 ・公演、展示などの鑑賞の時鑑賞料の一部を支援

(ソウル市庁ホームページによる、<http://www.seoul.go.kr>、2013.10)

19) 韓国での経済用語で、すでに開発された産業やマーケットをレッドオーシャン、まだ開発されず、無限大の可能性を持っている分野をブルーオーシャンと示す。

本部」の所属である「文化課」を「文化政策課」と改めた。さらに、2007年7月30日には「文化政策課」から芸術政策の分野を分離させ、「文化芸術課」を新しく新設したのである(表1)²⁰⁾。

「文化政策課」が施設の運営に関するハードウェア的な部門を担当するとするなら、「文化芸術課」では市民に直接関わるソフトウェア的な部門を担当している。

2012年度、文化政策に対するソウル市のビジョンは、「一緒に創造する文化都市」を作るということだった²¹⁾。それに沿って大きく二つの政策目標が立てられた。その中でも市民の幸福や豊かな生活のために文化活動を支援するということを明確にし、そのための重要戦略が発表された(表2)。

その中でも市民の芸術活動に関する項目が多い。特に「市民と一緒に作る芸術文化プログラムの拡大」の項目では、市民を対象にした様々な芸術文化教育プログラムが実施された。その目標は市民の自発的な参加を通じて、芸術文化の格差を解消することであった。また、芸術文化から疎外されている人々を訪問し、公演に招待したり、芸術文化教育など、特定層のために特化されたサービスを提供した(表3)。

(2) ソウル文化財団

ソウル市で行なわれている芸術文化政策は、芸術文化課が中心になっていて、そのほとんどの事業が「ソウル文化財団」によって行なわれている(表4)。

ソウル文化財団は、文化や芸術を通じて生活の質を上げ、ソウル市の都市競争力を挙げることを目標として2004年に設立された。芸術家の芸術活動を支援し、市民の芸術文化活動の支援を基本目標としている²²⁾。

ソウル文化財団はソウル市で行なわれている、様々な芸術文化に関する事業をソウル市から委託されて行なっている。その中でも教育事業に力を入れている。

ソウル文化財団の芸術文化教育プログラムは、子供や青少年を対象にする事業と、一般市民を対象にする事業、専門家養成を目的にする教育事業に大きく分かれる。子供と青少年を対象にする教育は「子供創意 Arts-TREE」と「青少年ビジョン Arts-TREE」に分かれる。「子供創意 Arts-TREE」は放課後、低所得層の子供たちに学校の保育教室を活用し、芸術文化教育を提供することで、文化的な不平等を無くそうと始まった。「青少年ビジョン Arts-TREE」は2004年から2007年まで進行されていた青少年サークル支援事業の連続で、2008年に改めて行なわれている。

20) キム・コンタク「財政分析を通じた芸術文化政策の効率性再考法案」ソウル市立大学大学院、修士論文、2009年、p.16

21) ソウル市庁ホームページ、<http://www.seoul.go.kr>

22) ソウル文化財団ホームページ、<http://www.sfac.or.kr>、2013.10

また一般市民を対象にする芸術文化政策には、「夢見る青春芸術大学」と「社会文化芸術教育」がある。「夢見る青春芸術大学」はソウル市が企画し、ソウル文化財団が実行する教育プログラムである。高齢者の芸術文化教育が増えることにつれて、高齢者が芸術文化をみずから創り出す体験ができるように用意されたものである。そして「社会文化芸術教育」はその対象である障害者、保護施設の児童、多文化家庭や移住労働者の環境を考えて開発された²³⁾。

ソウル文化財団はソウル市の芸術文化政策のすべてを代弁していると言っても過言ではない。設立初期には地域を代表する文化財団として確立してないことや、芸術文化事業が市民のものでなく、展示性の強い大型イベントが多いことが指摘

表4 ソウル文化財団事業内容

芸術支援	芸術創作支援 有望な芸術分野支援 公演会場常住団体体育支援事業（委託） ソウル芸術祭支援 ソウル文化企業育成支援 芸術支援システム及び管理システム改善
芸術教育	子供・青少年創意芸術教育 夢見る青春芸術大学（委託） ソウル創意芸術教育アカデミー ソウル型創意芸術教育体系構築 ソウル芸術文化教育支援センター（委託） 社会芸術文化教育支援事業（委託） 学校芸術講師支援事業（委託） 土曜文化学校（委託）
文化事業・文化福祉	ソウルダンスプロジェクト ソウル型美術銀行「バラムナン（よろめく）美術」 記憶の人、ソウルプロジェクト ギイ取水場の空間再活用コンテンツ開発事業
空間運営	創作空間統合事業 ソウル演劇センター 南山芸術センター 創作練習空間 市民庁 運営事業（委託） ガーデンファイブ 文化特区事業（委託）
広報マーケティング	文化ソウルイメージ広報強化 芸術文化に関する刊行物の発行 オンライン文化情報事業
ガバナンス及び文化ネットワーク	文化政策開発及び支援事業 ソウルメセナ支援事業 文化提携・芸術寄付活性化事業 ソウル芸術の韓流化及び振興事業

（ソウル文化財団ホームページによる、<http://www.sfac.or.kr>、2013.10）

23) イム・キョンジュ「演劇を通じた老人の人生の質に関する研究—教育演劇方法論を中心に—」成均館大学院、修士論文、2009年、pp.49-50

されることもあった。しかし、一方では専門性を生かした多様な実験や積極的な事業開発でソウル市の文化政策を先導したという評価もある²⁴⁾。

3 — 夢見る青春芸術大学

(1) 目的

60 歳以上の高学歴をもつ高齢者が増えることによって、現代社会はこのよう
な人々を受容できる施設や芸術文化教育を必要とするようになった。以前は成人
になった子供に世話をしてもらった受動的な立場だった高齢者は、時代の変化や経
済の発展によって多様な欲求を持ち、自分から社会に出ようとする能動的な存在
に変わってきた。

2005 年、韓国統計庁で発表したデータによると、65 歳以上の高齢者の人口は
2000 年を基点に総人口の 7% を上回り、本格的な高齢化社会に突入し、2018 年
には 14% を超えると予測している。総人口の 14% を超えると、それはもう高齢
化ではなく完全に高齢社会になっていることであろう。さらに、高齢者の比率が
7% から 14% に到達する時間は 18 年、14% から 20% に到達する時間は 8 年で他
の先進国に比べても早い速度で変化が進んでいくと予測される²⁵⁾。

平均寿命が高くなり、高齢者の人口は増えていくのに対し、高齢者を対象とす
る福祉政策は充分でないのが現実である。このような高齢者問題は韓国だけでなく
日本はもちろん世界共通の問題であるだろう。今までの高齢者は社会の中心から
外れたところにいる存在として、若い世代に扶養されなければならない社会の
弱者として分類され、経済的にも文化的にも疎外されてきた。このような認識の
せいで彼らが社会に貢献したことは過小評価され、無視されてきたのも事実である。

しかし、時代の変化や経済の発展により、今までとは違って経済的にも独立し、
時間的にも余裕を持つ高齢者が増えてきた。したがって、高齢者たちが社会に求
めるものも福祉から文化、芸術まで様々な分野に広がった。特に最近注目される
のが高齢者たちの芸術文化活動である。

韓国より早く高齢社会に突入した日本では、企業が中心になって設立された私
立カルチャーセンターが中心となり、高齢者たちの芸術文化活動が活発に行なわ
れている。実際に大手のカルチャーセンターの一つ、「東急セミナー BE」が発表
しているデータによると、2012 年度の受講生の中でも 60 歳以上の受講生が最も

24) キム・コンタク「財政分析を通じた芸術文化政策の効率性再考法案」ソウル市立大学大学院、修士論文、2009 年、p.16

25) キム・ヒョンジュ「老人芸術文化教育の効果の社会文化的意義研究」ソガン大学大学院、修士論文、2010 年、p.3

多く、55.9%を占めているのが分かる（表5）。

芸術文化教育は高齢者たちに自信を持たせるのはもちろん、彼らを社会の中に戻すことや世帯間の差も縮めることまで可能であろう。

韓国の芸術文化教育は、民間機関がほとんどを占めている日本とは違い、政府が主催している政策によるものが多い。

これまで韓国の芸術文化は、芸術を専攻する人やある程度の教育を受けた若い人を中心に行なわれることが多く、特定の人たちが楽しむ教養であり、庶民は接することがあまりない領域として認識されてきた。

西洋的な文化になれている若い世帯を対象にすることが多く、社会の疎外層である高齢者や貧困層まで届くことはあまりなかったのが今までの現実であった。特に高齢者の場合は社会の急速な高齢化にもかかわらず、彼らを対象にする芸術文化政策はあまりシステム化されなかった。あったとしても形式的なもので単純に時間潰しの余暇活動に過ぎなかったのである。

しかし、最近になって文化福祉という概念の登場で、今までのように階層的で階級的だったものから誰でも楽しめるものに認識が変わりつつある。さらに、時間的にも経済的にも余裕が出来た高齢者のための芸術文化教育が注目されるようになった。

芸術文化活動は高齢者と若い世代を繋ぐのはもちろん、高齢者たちに社会構成員として居場所を作り、持続的に参加できる機会を提供する。このような目標を実現するために企画された政策の一つが高齢者を対象にして新しい形の高齢者の芸術文化教育を志向している「夢見る青春芸術大学」である。

この事業は2008年18団体のプログラムで始まり、2012年には演劇、ミュージカル、舞踊、映像・映画、美術、音楽など多様なジャンルの27個のプログラムに拡大され、ソウル市内の文化会館や高齢者福祉館などで行なわれている。2013年には26の教育団体がプログラムを実施している。また、「夢見る青春芸術大学」は授業以外にも活発な活動を希望する人のために、サークル活動や疎外階層を直接訪問して公演したり、高齢者自身が補助講師として活動することで、社会還元活動を持続的に行なっている²⁶⁾。

表5 東急セミナーBEの年齢別比率（2012年10月）

年齢	合 計	0-9歳	10-19歳	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70-79歳	80歳以上	回答なし
人数	12,567	39	550	255	541	1,250	1,992	2,563	2,800	1,658	919
%	100.0%	0.3%	4.4%	2.0%	4.3%	9.9%	15.9%	20.4%	22.3%	13.2%	7.3%

26) キム・ヒョンジュ「老人芸術文化教育効果の社会文化的意義研究」ソガン大学大学院、修士論文、2010, p.26

2013年度の「教育課程設計及び随行専門団体公募提案要請案内書」では、その教育の目的を次のように述べている（表6）。

ここで注目すべきことは、教育成果を共有し、社会還元活動を行なうという4番目と、芸術文化活動で高齢者たちを文化媒介者として育成するという6番目の項目である。

この2つの項目が今まで高齢者を対象とした他の社会教育プログラムと比べて一番大きい違いであり、この「夢見る青春芸術大学」だけの新しい目標と言える。

「夢見る青春芸術大学」プロジェクトの一番の目的は、ただ単発的に見せるものではなく、教育を終えた後も高齢者たちが自らやってきたことを、社会に還元することを目的としている。

芸術文化教育を受けた高齢者たちは、自分たちが一年間作り上げた作品を社会に還元するため、自治区の人々―貧困層や疎外層の人を含む―を観客として招き、公演をする。この仕組みは今まで社会で弱者であった高齢者たちに、社会での新たな場所を提供するのはもちろん、高齢者たちがただ単純に受ける側だけでなく、生産する側として、また文化媒介者として社会の中で活躍する機会を提供する。そして、それこそがこの「夢見る青春芸術大学」の大きな目的である。

「夢見る青春芸術大学」は60歳以上の高齢者を対象に、地域にある文化施設を利用し、芸術文化教育を行ない、プロジェクトを行なうために参加できる芸術教育団体を公募で選考している。

初年度の2008年には8団体だった参加団体は2年目には2倍も増え、2012年度には27団体まで増えた。2013年には26団体で1団体が少なくなっているが、初年度と比べると、2011年からは参加団体数が安定している。さらに、2013年度の26団体のうち24団体が2012年につづけて選考されていた²⁷⁾（表7）。

表6 「夢見る青春芸術大学」の目標

・高齢化時代の高齢者が主体になる芸術文化教育の活性化
・自治区の芸術文化空間の発掘・活用、及び世代間の疎通や和合のためのプログラム開発
・老年層の芸術文化教育分野の職づくり
・地域住民との教育成果を共有（発表会、展示会など）、及び社会還元活動で地域コミュニティの活性化
・体験と経験、そして教育の過程を通じて高齢者の誇りや達成感を高める
・高齢者の芸術文化活動の活性化、高齢者を文化媒介者に養成
・教育随行団体と団体間交流、及び力量強化を通じた専門性の高まり

（2013年度、提案要請案内書参考）

表7 「夢見る青春芸術大学」の教育団体参加状況

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013
教育団体	8	17	21	25	27	26
運営自治区	8	16	15	25	25	23

（ソウル文化財団ホームページによる、<http://www.sfac.or.kr>）

(2) 評価と分析

芸術文化教育政策を評価することの目的は改善にある。教育は本来、有目的であり、計画的な事業であるため、その価値と理想を実現するために、その目的と計画を価値と理想を根拠にして分析し、反省する段階が必要である。つまり、その段階が評価であり、評価は学習者の成長を確認することはもちろん、教育プログラムの効果と問題点を把握し、改善することを最終的な目的としている。したがって、一つの教育プログラムが企画されるのであれば、その準備段階から評価方法、及びその内容を含む評価計画が共に準備されなければならない²⁸⁾。

「夢見る青春芸術大学」の各プログラムの評価は芸術文化教育の企画者や教育専門家などで構成された、5人の専門家によって行なわれた。専門家たちはソウル市から委託され、コンサルティングや現場モニタリング、また市民満足度を調査する。

この調査はプログラムが終了した後だけではなく、中間評価としてプログラムの進行中にも行なわれた。評価の基準は、自分たちのプログラムの優秀性より、各教育団体が本プロジェクトの目的に合わせた教育を行なっているかに主点がおかれた。その評価の結果資料を基に、カン・ジョンヒョン²⁹⁾は次の三つで評価を分析した。

まず、参加者たちの反応と変化に注目した。プログラムが進行されていくにつれ、高齢者たちは体で表現することにより、健康と活気を回復し、積極性もみせたと分析した。さらに、展示や公演など、プログラムの最終結果物が地域社会に発表されることを認知して作品作りに積極的な姿勢をみせたことに注目した。

二つ目は、ほとんどの教育団体がプログラム進行に対して積極的な姿勢をみせたことである。高齢者との相互作用を通じて学習効果を経験し、教育団体の交流の必要性について述べた。さらに、三つ目には、教育が行なわれる自治区の機関と教育団体との協力と役割の分担は重要な部分であり、機関の担当者の授業参観や交流はプログラムの質を向上させるのはもちろん、参加者の満足度にも影響を及ぼすことがあると分析した。教育団体と教育機関はそれぞれ責任を認識し、責任感のある協力が必要だと分析した³⁰⁾。

また、他の評価では多様な方式での参加活動で、高齢者たちは積極的な文化生産者に発展して、自信を持つようになったと分析している。社会に対してポジテ

27) 2012年に参加していた、アートカンパニー幸福者、劇団ローヤルシアター、国楽ヌリの3団体が抜け、2013年には想像広場、ビリーブアートの2団体が加わった。

28) 韓国文化芸術教育振興院「文化芸術教育プログラム、どう評価するか」2010年、p.6

29) ソウル市庁の文化デザイン本部の芸術文化課に勤務し、2008年に「夢見る青春芸術大学」の企画者として参加していた。

30) カン・ジョンヒョン「公演芸術の創作活動を通じた老人文化芸術教育の効果に関する研究」『公演芸術ジャーナル』第16号2009年、pp.75-79

ィブな思考を持つようになるなど、変化を見せたと評価している。さらに、最終発表会という課題で高齢者たちの間に協同心がうまれるようになり、一般市民との絆を強化したと評価した。しかし、教育の場所として活用されている施設の環境や、芸術教育団体の高齢者に対する理解不足など、現場での問題点を指摘した³¹⁾。

韓国の芸術文化教育プログラムの評価システムはまだ体系化されず、それぞれのプログラムごとに、評価基準が異なるのが現実であり、評価分析を行なう研究者がどこに基準を置くのかによって評価の方式や視点が異なっている。

このようなことを防ぐために、基準を統一することが必要である。そこで「韓国文化芸術教育振興院」³²⁾は2010年評価の基準として評価方法を提案している。

次に行なう「劇団モイセ」の評価、及び分析には「韓国文化芸術教育振興院」が提案した方法を利用することにする。

(3)「劇団モイセ」の事例分析と評価

筆者は2012年5月から12月まで、「夢見る青春芸術大学」の参加団体である、「劇団モイセ」に講師として参加した。「劇団モイセ」は今回が初めての参加で、教育を行なう場所になる地域機関を探すのに苦労し、プログラムを進行する間にも様々な問題点が見つかった。ここでは、筆者が実際現場で感じたことや問題点について分析することにする。

劇団モイセは、韓国と日本の芸術人によって2007年に結成された団体である。

多文化を背景に持つ団体であり、その特徴を生かして子供や一般人に多文化に関する芸術文化教育を行なっている。

光と影の効果を利用し、複雑な動きから鮮やかな色の表現まで、想像力を刺激する教育が認められ、数多くの小学校や劇場を中心に公演はもちろん、芸術教育を行なってきた。

さらに韓国の伝統音楽を中心に、アジア諸国の音楽の演奏や役者の登場で、単純な視覚芸術である人形劇を総合芸術に昇格させた。「夢見る青春芸術大学」のプロジェクトの参加においてはこのような実績が求められたのである。

劇団モイセの芸術文化教育は総合芸術としてはもちろん、アジア諸国の異文化を理解する課程にもなり、教育を終えた高齢者たちは事後活動も期待される。

この論文では、2012年5月から12月まで行なわれた、劇団モイセによる、芸術文化教育を分析・評価するにあたって、今まで体系化された分析や評価の方式がないため、「韓国文化芸術教育振興院」が評価の基準として提案した方式³³⁾を

31) キム・ヒョンジュ「老人芸術文化教育の効果の社会文化的意義研究」ソガン大学大学院、修士論文、2010, pp.24-35

32) 2004年、文化芸術教育活性化総合計画の一環として設立された。政府の公共機関として全国の芸術文化教育に関する事業を担当している。

33) 〈参考資料2〉参照

参考にして分析・評価を行なうことにする。

1) プログラムの運営

(a) 物理的資源

(i) 雰囲気

参加者である高齢者の多くは興味を持ち、積極的に参加した。生徒の高齢者たちは、すでに「江西老人総合福祉会館」では多くの社会教育が行なわれており、受講者のお互いはすでに知り合いだったため、教室の雰囲気は初期から友好的であった。

しかし、プログラムが進行されているにつれ、チームごとに固まる現状を見せたため、講師の特別な気配りが必要な場合もあった。

(ii) 物理的資源

本プログラムが行なわれた「江西老人総合福祉館」では、すでに様々な社会教育プログラムを積極的に行なわれていた。そのため、本プログラムのために配分された教室は、語学で使われる教室であり、映像を使う本プログラムには適切ではなかった。

さらに、週2回の授業にも関わらず、少しは預けたものの、機材を置ける場所が足りなくて毎回運ばなければならなかった。

公演が近づき、総合練習をする時は、別に発表会準備をしている他のクラスと一緒にスタジオを分けて使わなければならなかった。

(iii) 管理、及び組織

予算に関しては、プログラムが始まる前にすべての出費項目を提出し、

表8 2012年度参加団体、劇団モイセのプログラム

プログラム	影人形劇
実行地域・施設	江西（カンソ）区、市立江西老人総合福祉館
対象	江西区に住んでいる60歳以上の人
地域の特徴	ソウルの西に位置している。1970年代に新住宅地として開発され、大きい団地が造成された地区である。現在は再開発が進む過程にある。中産層が多い地域であり、60歳以上の人口が15.35%を占めている ³⁴⁾ 。
教育内容	多文化を理解するため、日本、ベトナム、インドネシアのそれぞれの昔話を人形劇に再構成し、最終的には多文化を持つ人々を対象に公演する。 1) アジアの昔話を選び、台本を作る 2) 台本を基に、各場面を紙で制作 3) 影絵の声合わせや役者の表現練習 4) 音楽に合わせた練習 5) 公演

34) 江西区役所のホームページ、<http://www.gangseo.seoul.kr/>、2013年7月

予算を配分してもらおう。そのため、教育が行なわれる8ヶ月のあいだ、予想外に起こる出費に関しては対応が出来ない場合もあった。プログラムは企画段階からスケジュールが決まっていたが、その通りには出来ず、進行に少々遅れがでた。

参加者に関する記録やプログラム運営の記録は、最初から提示されたものは無かったが、独自に写真やビデオで記録し、プログラムが終わると参加者全員に渡した。

(b) 人的資源

(i) 講師

「劇団モイセ」の講師の構成は、プログラムの特徴上、演劇や音楽、美術の専攻者で構成された。講師たちはそれぞれ、自分の専門分野を担当し、お互いに協力しながらプログラムを進行させた。

講師たちの年齢は30代から40代までで、高齢者たちの子供と近い世代だったので、共通の話題が多く、会話をするのにそれほど世代違いの混乱はなかった。

(ii) 学習者の参加

プログラムが行なわれた「江西老人総合福祉会館」は市立との立場もあって、外の行事が多く、そのために受講生である高齢者たちを呼び寄せることもあり、授業の進行が遅れることもあった。

参加者を持続させるため、講師たちとの交流の機会を増やしたり、いろいろなイベントを準備したが、その効果を期待を満たすものではなかった。

(iii) パートナースhip

教育の場所を提供してくれた「江西老人総合福祉会館」で、場所の提供以外、特別な協力は無かった。

(iv) 関係

講師と受講生との関係はプログラムの進行につれ、お互いの立場を理解し、尊重する傾向がみえ、絆ができたように感じた。

その反面、プログラムが終わるまで地域社会との交流はほとんど無く、プログラム関係者とも交流は無かった。

2) プログラム

(a) プログラム

(i) 目標

「劇団モイセ」のプログラムは、紙や透明なフィルムを使って人形やいろんな形を作り、光で照らして動きを作る、影人形劇である。その過程で受講生は総合的な芸術的経験ができる。

しかし、単純に面白い話を作って見せる芸術活動ではなく、多文化の理

解もその目的である。高齢者の世代はアジア諸国に対して、韓国に出稼ぎで来る貧しい国の労働者、または貧しくて韓国人と結婚するというイメージが強く、偏見を持っている場合が多い。高齢者たちがアジア諸国の昔話や童話などを通じて、その国の文化を理解し、普段は余り興味を持つことのなかった異文化にたいして興味をもたせるのと同時に、偏見を和らげる効果も期待されるのである。

(ii) 内容

「劇団モイセ」が行なう教育プログラムは、最終的には公演を目的に台本作りからキャラクターのデザインまですべてを受講生と一緒に行ない、最終公演の時には受講生である高齢者たちが声優や俳優、舞台裏の人形操作まで、すべてを自分たちの力で行なうようになっている。

制作する話は日本、ベトナム、インドネシアの3国の話に決められた。日本に決められた理由としては講師の半分が日本人であったことから影響を受けたと思われるが、ベトナムやインドネシアの場合は、韓国内に多くのベトナム人妻やインドネシア労働者がいるということで選ばれた。

(iii) 方法

各話ごとにチームを分けて、どの国の話を制作するかを決める。制作の順は各国の童話や昔話を基本に台本を作る。その後コンテの作成。絵を描いて人形を作り、音楽と合わせて作品を完成させていく。

材料は紙を主にして、光を通せるものを使い、その特徴上ハサミやカッターを使う場合が多く、受講生である高齢者たちには難しい場合もあった。一つの場面を作り、光を通してスクリーンに写して確認しながら完成していく方法でプログラムは進行された。

(b) 効果性

(i) プログラムの効果

人形や話の背景になるものを作りながら、高齢者たちは驚くほどの集中力をみせ、自分が描いた絵が大きいスクリーンに写された時は嬉しかったと言う。さらに、絵を描く作業をする過程では、まさに美術治療を受けているように心が落ち着いたと言う高齢者もいた。

(ii) 需要者の満足度

参加者たちは上演する話を決めるため、東アジアについて調べたり、公演の観客になる、子供や多文化を持つ人々のことを踏まえて選択した。

この作業は、今まで家族のために尽くしてきた彼らに子供が成長した後にもう一度、誰かのために何かを作るという喜びを蘇らせたのである。

公演の時にはそれぞれの家族も招待し、自分たちが作りあげたものを披露した。家族や本人たちはもちろん、公演を観に来ていた観客も非常に満足し、今まで知らなかった国の話や音楽に興味を見せた。

(iii) プログラムの持続可能性

「劇団モイセ」のプログラムに参加した高齢者の一部は今後もこのような活動を続けたいと表明し、2013年8月に開催された「第25回春川人形劇際」に「劇団モイセ」と一緒に参加することが実現された。

3) プログラム評価

(a) 目標の適合性

教育プログラムの評価に当たって、その目標の適合性が重要であることは言うまでもない。芸術文化教育とは社会との疎通で成り立たねばならない。さらに、個人的な創造活動はもちろん、社会構成員としての役割までを含むのが芸術文化活動であり、本教育プログラムの目標でもある。

その意味で、本プログラムは適合性があると言えるだろう。技能を上達させる既存の教育とは違い、「劇団モイセ」の教育は芸術としての完成度を追求するより、その製作過程で得られる経験や認識の変化が受講生本人はもちろん、社会にどのように反映され、還元できるかに焦点を置いていた。

さらに、今までは関心を持っていなかった異文化を理解する機会にもなり、自ら体験することで、受講者の文化的な価値観に確かな変化は合っただろう。また、一つの作品を完成させて公演することで、今まで自信を持っていなかった芸術という分野において自信を持たせる機会になった。

(b) 内容の妥当性

内容の妥当性を評価するには、プログラムが教育を受ける学習者の文化と関連性があるかを見ることが多い。しかし、本プログラムでは、高齢者の文化というより、高齢者が今まで体験出来なかった多様な経験をするにより、今まで持っていた固定観念を脱皮することにその意義があると筆者は確信している。実際、教育の進行中、今まで偏見を持っていたアジア諸国に対して友好的な感情を抱くようになったという高齢者もいたのは固定観念脱皮の一例といえよう。単純に多様な経験をして終わるのではなく、その経験を基に新しい目標に目を向けることがもっとも重要である。

その意味では、本プログラムは高齢者たちに、社会還元活動という新しい目標を与えたといえる。

(c) 方法の適切性

方法の適切性では、学習者が自分の視野を拡張させていく段階や、新しいことに対して沸く好奇心の段階が含まれているかを中心に評価する。

本プログラムが進行するにつれ、高齢者たちの表現力は自由になり、だんだん大胆になっていった。それは今まで固定観念で硬くなっていた視野が広がり、自ら新しい方向に発展していったことを表している。

4) プログラム効果性の評価

プログラムの進行中は、各チームの進行状況をお互いに共有し、意見を交換しながら評価を行なった。この過程は講師による評価ではなく、受講者間の交流によって行なうもので、お互いに良い刺激になり、各チームの作品に高い完成度をもたらした。

4——結論

ソウル市で行なわれている芸術文化政策は、韓国を代表する政策だと言ってもいいほど、韓国の文化政策と共に変化して来た。特に社会の疎外階層である高齢者や低所得階層、多文化家庭、外国労働者などに対する文化政策が活発に行なわれている。

芸術に関する文化政策は、現代の最も有望な事業として力を入れており、特にソウル市では市民を対象にする芸術文化教育プログラムに注目している。

今まで芸術文化の領域は限られた人たちのためにしか存在しなかった。しかし、社会は経済や技術の発展により、余裕が出来た高齢者が文化に興味を持つようになり、その中でも芸術の分野は新しい産業として注目されるようになったのである。

芸術文化教育は長期的に継続しなければならない社会教育であり、公共的な事業である。そのため、各地方の自治団体や政府はその価値や必要性に応じた政策を行なわなければならない。

「夢見る青春芸術大学」は2008年から現在まで、毎年行なわれている芸術文化教育プログラムであり、これまで述べた評価で分かるように、成功した事例として挙げることができる。

このような形態を持つプログラムの研究は、高齢者だけではなく、子供や青少年、さらに外国人労働者や多文化家庭まで、多様な階層をターゲットに開発される事業に、一つのモデルとして活用されると期待できるだろう。

また、未だに体系化されていない、芸術文化教育政策の評価方法についても、具体的な評価基準を明確にすることが必要性である。

本研究ではソウル市が行なっている芸術文化教育について、どのような仕組みで行なわれているのか、特に高齢者を対象として行なわれている「夢見る青春芸術大学」に参加した教育団



楽器を演奏する前にリズムの練習をする受講生たち



アジア各国の楽器の体験

体「劇団モイセ」を具体的な例として分析を行なった。

2012年度に初めて「夢見る青春芸術大学」プロジェクトに参加した「劇団モイセ」は、これまで多くの公演や教育活動で実績を積んできたのである。しかし、このような長い期間の教育プロジェクトには初めての参加になり、その教育対象も子供から高齢者変わったことで様々な課題を抱えることになった。

自由奔放な発想や表現をする子供に対し、高齢者たちは芸術に対して固定観念をもっていたため、その意識を脱皮させるのに少々のかかったのである。たとえば、自分は絵が上手ではないのでこのプログラムにはふさわしくないとか、登場する人物や物の彩色は必ず実物どおりでないと行けないという考えから表現に限界があった。その固定観念を脱皮するように誘導するのも講師の仕事であり、最初の台本作りからキャラクターを作るまでずいぶんの時間がかかってしまった。

また、半年が過ぎてからは、興味を持って新たに参加しようとする人に対し、仲間に入れないなど、排他的な態度をみせたり、講師は自分のチームを維持するのに苦労をしたのである。さらに、本プログラムは繊細な作業が多く、高齢者には難しかったのも事実である。

今回の「劇団モイセ」のプログラムを分析した結果から、「劇団モイセ」はもちろん、「夢見る青春芸術大学」プロジェクトに関わるいくつかの問題点をあげることができる。

「劇団モイセ」は、元々は子供を対象にしていたプログラムをそのまま高齢者を対象に行なうことで、プログラム進行に多少の無理があった。作業の細かさや道具の使い方などで、子供や若い人とは違う彼らの身体的条件を考慮してなかったことは一番の間違いであった。教育の対象になる高齢者の特徴をずいぶん理解できなかったことがその原因であることは言うまでもないだろう。

次に、施設に関する問題である。2012年、「劇団モイセ」が本プロジェクトに参加しようとしたとき、一番苦労したのが教育を行なう場所であった。「夢見る青春芸術大学」は基本的に、参加団体が教育を行なう場所を自ら見つけなければならない。教育を行なう場所である公共機関が見つからない場合には「夢見る青春芸術大学」プロジェクトに参加することが不可能となってしまう。

しかし、地域の公共機関は約1年間という長いプログラムに貸せるほど教室に余裕がないため、無料で利用する教育団体に場所を貸してくれる機関が少ないため参加団体は公共機関に対し比較的弱い立場であると言える。「劇団モイセ」もそういう立場であり、例えば公共機関の行事で受講生が欠席しても協力するしかなかった。

最後に、地域社会に対し広報が十分に行なわれていなかったことである。

プログラムの終わりに行なわれる発表会は地域社会への還元活動であり、本プロジェクトに参加する団体の義務でもあるため、「劇団モイセ」も最終には公演を行なった。しかし、地域社会に十分な広報が行なわれていなかったため観客数

が少なかったことが残念である。

「夢見る青春芸術大学」は現在ソウル市の芸術文化教育政策の中でも最も注目されているプロジェクトである。しかし、ソウル市は現場のすべてのことを民間の教育団体に任せており、現場の管理や検討を実際に行っていないという問題がある。

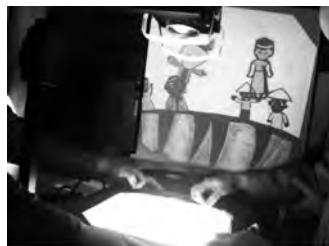
さらに、ソウル市は「夢見る青春芸術大学」への参加条件として、参加人数を一つのプログラムに20人以上と決めているが20人以上の参加というのは非常に難しい。同じ機関で行なわれている別のプログラムと同時に受ける高齢者が多く、最初は興味を持って集まっていたも最後まで継続する人は少なかった。

私立のカルチャーセンターとは違い、市や区で行なわれている教育プログラムは全プログラムが無料で行なわれているため、始めることも気楽ならやめることも気楽にできてしまうのである。

このような現場状況は教育の質を下げる原因になる。また、教育を行なう芸術団体のプログラムがほとんど同じジャンルであることも「夢見る青春芸術大学」の限界であるため、適切な方法が考えられなければならない。

しかし、以上の様々な問題はあったものの、今回の「劇団モイセ」の大きな快挙は何よりも、2012年に続き、2013年にも参加団体として選ばれたことであり、2012年に参加した高齢者たちが2013年にも続けて活動できたことである。

この論文がこれからも続いて行く「劇団モイセ」の活動を少しでもいい方向に向かうために役に立つことを期待することはもちろん、他の現場で活躍している芸術教育団体のために活用されることを期待したい。



光を照らし、人形の動きを確認する



完成した作品で総合練習

参考資料1 2012年度「夢見る青春芸術大学」参加団体（ソウル文化財団提供資料）

教育団体名	自治区	教育場所	教育分野
1 ファンボ教育研究所	龍山（ヨンサン）区	市立龍山老人総合福祉館	映像（映画）
2 （私）出北文化芸術人総連合会	陽川（ヤンチョン）区	陽川老人総合福祉館	音楽
3 劇団絵の演劇	松坡（ソンパ）区	松坡老人総合福祉館	人形演劇
4 韓国ラバン動き研究所	江南（カンナン）区	江南区立ノンヒョン老人総合福祉館	舞踊+演劇
5 ノンナドリ	銅雀（ドンザク）区	ホンドン総合社会福祉館	演劇+視覚芸術+文学
6 芸術共同体スケネ	中浪（チュンラン）区	中浪区立情報図書館	演劇+舞踊
7 即興プロジェクト	中浪（チュンラン）区	メンモク住民センター	舞踊+美術+音楽
8 公演創作研究所イスルギル	道峰（トボン）区	道峰老人福祉センター	演劇（統合芸術教育）
9 ブラクシス	冠岳（カンアク）区	中央社会福祉館	演劇
10 アートカンパニー幸福者	蘆原（ノウォン）区	市立スラク老人ホーム	演劇+音楽+美術
11 ドンサンドンクム	江西（カンソ）区	江西図書館	演劇+伝統音楽+視覚
12 ヨンヒ集団THEクァンデ	城北（ソンプク）区	ジョンルンシルバー福祉センター	伝統芸術+演劇
13 （私）ソドソリ振興会	東大門（ドンデムン）区	ドンデムン老人総合福祉館	伝統音楽+演劇+舞踊
14 尋ねるヨンヒ劇団ノヨンナヨン	恩平（ウンピョン）区	ウンピョン文化芸術会館	演劇+伝統宴
15 ミュウジウム教育研究所	瑞草（ソチョ）区	ソチョ区立バンベ老人総合福祉館	美術（鑑賞+創作+美術館学習）
16 劇団ロイヤルシアター	西大門（ソデムン）区	ソデムン文化会館	演劇（楽劇）
17 ゴドアート	城東（ソンドン）区	ソンドン老人総合福祉館	美術
18 エイスベンチュラ	鍾路（チョンロ）区	ソウル老人福祉センター	手品+演劇（マイム）+音楽
19 サダリ演劇ノリ研究所	廣津（クァンジン）区	広場総合社会福祉館	演劇ノリ
20 成功読書コーチンセンター	中（チュン）区	ユラク総合社会福祉館	文化記者課程
21 オリブとチンコン	九老（クロ）区	九老アートベリー	演劇
22 ビリーブアート	廣川（クンチョン）区	廣川老人総合福祉館	地域の自然生態+地域歴史+演劇+音楽+美術+物語創作
23 国楽ヌリ	麻浦（マポ）区	ソンミサンマウル劇場	民謡+演劇
24 ソウル舞踊教育院	江東（カンドン）区	ソンガジョン老人総合福祉館	舞踊
25 劇団モイセ	江西（カンソ）区	市立江西老人総合福祉館	演劇+美術+音楽
26 青少年専門劇団ジンドン	江北（カンブク）区	江北老人総合福祉館	教育演劇+演劇治療
27 ナムム演劇研究所ソブン	永登浦（ヨンドンポ）区	永登浦老人総合福祉館	演劇+ラインダンス+ミュージカル

参考資料2 韓国文化芸術教育振興会が提案した評価指標

評価領域	評価項目	評価指標
プログラム運営	物理的資源	雰囲気
		参加意思、相互作用の学習雰囲気
	物理的資源	はげまし、相互尊重の安定した雰囲気
		芸術文化活動のための空間確保
		施設活用
		運営時間の適合性
		講師1名あたりに学生の人数
		教材や資料の質
	管理、及び組織	予算規模の適合性
		予算配分の適合性
		予算執行の透明性
		参加者についての記録管理
		プログラム運営の記録
		適切な評価道具の有無
人的資源	講師	専門性
		学習者に対する理解能力
		適切な支援

			友好的な言葉遣い
			講師間の協力
学習者の参加			学習者のプログラム参与、進行
			学習者の参加活性化戦略
パートナーシップ			地域社会との協力
			学習者家族の協力と理解
関係			講師と学習者との関係
			地域社会との意味ある協力
			プログラム関係者との協力体系
評価領域		評価項目	評価指標
プログラム	プログラム	目標	芸術文化教育の観点での目標の適合性
			目標実現の可能性
		学習者のレベル	
		学習者の文化的成長の機会提供	
		内容	プログラムの目標にあう活動
			プログラム内容のレベルの適切性
			経験的な学習活動を含む
			学習者の文化を考慮した学習
		方法	生活との連携
			反省会を含む
	学習者の関心や能力に合わせた活動提供		
	グループ活動の進め		
	効果性	プログラムの効果	過程中心の活動
			授業の柔軟性
		講師と学習者との協力	
		学習者の参加率	
		プログラムの目標の達成度	
		学習者の学習動機と態度の変化	
		需要者の満足度	プログラム運営に対する満足度
			プログラム内容や質に対する満足度
プログラムの持続可能性		結果に対する満足度	
		プログラム持続のための長期的な計画の有無	
	プログラム改善のための柔軟性		
			プログラム関係者のフィードバック
			評価から発見された改善点
領域	評価項目	評価指標	
プログラム評価	評価の適合性	既存の芸術文化教育と差別化されたか。	
		目標に芸術の特性と文化的な価値が含まれているか。	
		学習者の文化的な発達レベルにあうか。	
		学習者の文化を考慮したか。	
		学習者の文化芸術的能力の変化を具体的に提案できたか。	
		学習者の現在の実力を考慮して出発しているか。	
	内容の妥当性	学習者の文化と関連性はあるか。	
		進行の内容に変化はあるか。	
		最初と最後の活動に関連性はあるか。	
	方法の適切性	反省会を含んでいるか。	
		探求の過程はあるか。	
		学習者の自立性を許可するか。	
		学習者の関心や能力に合わせた選択権を与えているか。	
		過程中心の活動をしているか。	

	学習者の成長のために専門的な支援はあるのか。
	講師との協力はあるのか。
	意味をつくる過程を含んでいるのか。
プログラム効果性の評価	単位授業の評価がთვისの授業に反映されるのか。
評価の効果性	評価が個別的に、日常的に行なわれているのか。
	評価の内容が学習者と共有されているのか。

《参考文献》

後藤和子『文化政策学』有斐閣、2001年

한국 문화예술교육진흥원 「문화예술교육 프로그램평가 어떻게 할 것인가?」 2010년

(韓國文化藝術教育振興院 「文化藝術教育プログラム、どう評価するか」 2010年)

한국 문화예술교육진흥원 「노인문화예술교육 모델 발굴 연구」 2010년

(韓國文化藝術教育振興院 「老人文化藝術教育モデルの発掘研究」 2010年)

임경주 「연극을 통한 노인의 삶의 질에 대한 연구-교육연구방법론을 중심으로-」 성균관 대학교 대학원, 석사논문, 2009년

(イム・キョンジュ 「演劇を通じた高齢者の人生の質に関する研究—教育演劇方法論を中心に—」 成均館大学院、修士論文、2009年)

강정현 「공연예술 창작활동을 통한 노인문화예술교육의 효과에 관한 연구-꿈꾸는 청춘예술대학 프로젝트를 중심으로-」 『공연예술저널』 제16호 2009년

(カン・ジョンヒョン 「公演芸術の創作活動を通じた高齢者芸術文化教育の効果に関する研究—夢見る青春芸術大学プロジェクトを中心に—」 『公演芸術ジャーナル』第16号 2009年)

김진탁 「재정분석을 통한 문화예술정책의 효율성 제고 방안-서울시 문화예술정책 중심으로-」 서울시립대학교 도시과학대학원, 석사논문, 2009년

(キム・コンタク 「財政分析を通じた芸術文化政策の効率性再考法案」 ソウル市立大学大学院 修士論文、2009年)

김현주 「노인문화예술교육 효과의 사회문화적 의의 연구-서울시민문화예술교육 ‘꿈꾸는 청춘 예술대학’ 사업을 중심으로-」 서강대학교 언론대학원, 석사논문, 2010년

(キム・ヒョンジュ 「老人芸術文化教育の効果の社会文化的意義研究」 ソガン大学大学院 修士論文、2010年)

류정아 「문화정책의 새 길 트기」 한국문화 관광 연구원, 2012년

(リュ・ジョン아編 「文化政策の新しい道づくり」 韓國文化観光研究院、2012年)

배관표, 이민아 한국 「문화정책의 대상과 전략의 변화:1988-2012」 『한국정책학회보』 제22권, 2013년3월

(ベ・カンピョ、イ・ミン아 「韓国文化政策の対象と戦略の変化:1988—2012」 『韓国政策学会報』第22巻、2013年3月)

서울시청, 문화관광 디자인본부 「주요업무보고서」 2012년

(ソウル市庁、文化観光デザイン本部 「重要業務報告書」 2012年)

《参考サイト》

韓國文化藝術教育振興院、<http://www.arte.or.kr>

文化体育観光部、海外文化広報院、<http://www.kocis.go.kr>

ソウル文化財団、<http://www.sfac.or.kr>

江西区役所、<http://www.gangseo.seoul.kr/>

ソウル市庁、<http://www.seoul.go.kr>

[YUK Seon]